連載

フィールド・アイ

Field Eye

パリから——③

一橋大学准教授　神林　龍

Ryo Kambayashi

▨パリのフットボール

パリにはフットボールクラブが実は2つある。

ひとつの都市に複数のクラブが併存すること自体は珍しいことではない。イングランドのマンチェスター，イタリアのミラノ，スペインのマドリッドなど，世界の主要リーグの中心には同一都市を本拠とするライバルクラブがあり，いわゆるダービーマッチがリーグに花とほんの少しの熱狂を添える。世界に名だたるフランスはパリにあっても，複数のクラブがあると考えるほうがむしろ自然かもしれない。

とはいえ，フランスリーグに多少通じた読者には違和感があるだろう。パリには名にし負うパリ・サンジェルマン・フットボール・クラブ（通称PSG）がある。リーグ優勝こそ少ないものの，各国代表選手をコンスタントに集め，フランスリーグでも屈指の人気クラブとして日本でも知られている。設立時にパリの政財界がこぞって応援し，過去パリ出身のダニエル・エシュテルが会長を務め，自らユニフォームをデザインするなど，そのファッションやマーケティング展開力には目を見張るものがある。シャンゼリゼの目抜き通りに堂々とブティークもあるから，パリに旅した方は，その少々モダンなユニフォームをどこかで目にしているかもしれない。パリのフットボールクラブといえばPSGであり，それ以外には思いつかないというのが大勢であろうし，昨年までの筆者だった。

ところが，昨年出張でパリに滞在していた折，偶然乗り合わせたタクシーの運転手とフットボールの話になると，彼が「自分の甥っ子がパリのフットボールクラブの選手なんだ」と言い出した。筆者はかなり驚いた。PSGといえばまさに高嶺の花，そこの選手のオジサンなんて，一体いくらチップをはずんだらいいんだと余計なことが頭を駆ける一方，選手の名前，ポジションを聞き出しにかかった。しかし，話が通じない。仏語なのか英語なのかいまひとつよくわからない言語を双方で操っているだけではなく，別なことを話しているかのようにも思えた。もう一度名前を確認すると，「さっき言ったじゃないか，パリのフットボールクラブだ」。「PSGじゃないの？」，「お前，知らないのか？パリにはもう一つフットボールクラブがあるんだ。名前はパリ・フットボール・クラブ」。

「知るわけないだろ」という言葉のフランス語も英語も，筆者にはわからなかった。

2010年4月にパリ市の一角に寓居を定めると，やおらパリ・フットボール・クラブのことを調べ出した。一応ウェブサイトがあり，一通りの情報が得られる。略称はPFC，所属は全国選手権で，フランスの中では3部リーグにあたる。日本では同じ位置にJFLがあり，プロとアマの境目だ。ホームスタジアムはスタッド・シャルティ，ちょうどパリ市の南の境界にあり，筆者の下宿からはバスで一本，20分くらいの距離だ。当時はリーグの終盤で，試合は金曜日の夜20時からが多かったので，仕事を終えた後のエンターテイメントにちょうどよいと思い，でかけてみた。

スタジアム周辺まで来ると，同じパリでも様相がずいぶんとかわる。道路の幅が広がり，自動車の交通量が増える。19世紀後半に起源をもついわゆるオスマン建築は影をひそめ，モダンな中高層アパートメントが建築物のほとんどをしめるようになる。人通りも心なしか黒人，アジア人など非ヨーロッパ出身者が多くみられたように思う。

スタジアム自体は陸上競技との共用ながら，全周を屋根が覆っている。PSGのホームスタジアム，パルク・デ・プランスほどではないにせよ，国内リーグの開催場所としては申し分ない。しかし，観客がいない。試合開始10分ほど前だというのに，100人に満たなかっただろう。使っているのはメインスタンドの1階正面部分のみで，そのほかの場所は閉鎖されていた。フランスリーグの場合，3部から2部に昇格できるのは3チームで，当時のPFCは3位とは勝ち点でそう離されていなかった。昇格の望みがまだあるにも関わらず，観戦者の数は少なかったのは意外だった。フットボールそのものは，3部リーグにふさわしく少々スピードに欠けるきらいがあったものの，フラン

スやオランダリーグにみられる１対１の勝負を邪魔しないという伝統を余すところなく発揮し，筆者としては楽しめる内容だった。とはいえ，同じ１対１を強調するオランダリーグと比較しても，チームプレーがあまりみられない。ボールと関係のないところでの駆け引きはそれほど頻繁ではなく，あったとしても１対１の結果の急展開に対処するためであって，あわただしい。一人ひとりの選手のプレーの意図が時間的にも空間的にもアドホックで，全般的にそれほど内容の濃い試合だったとはいえないだろう。小学生前後くらいのボールボーイがリフティングに興じていたりするなど，日本の JFL と比較しても，どこか緊張感のない，まじめさの足りない試合だったように思える。隣に座った大学生の解説によると，もう長い間（いまだかつて?）クラブにいた選手で結果的に代表に呼ばれた選手がいないとのこと，国内リーグの地盤沈下はこんなところに如実にあらわれるのだろうと嘆いていたのが印象的だった。

その後のワールドカップ南アフリカ大会でのフランス代表の惨敗ぶりは多くの読者もご存じの通りである。その中でフランス代表の独特のエリート養成システムについての批判も上がった。フランスで将来有望なサッカー少年たちは，中学生くらいの時分（13〜15歳）に国立の選手養成所（俗にクレールフォンテーヌと呼ばれる施設を中心に全国に 9ヵ所ある）に選抜され，そこで 3 年間育てられる。フランスらしい，エリート的な育成組織だ。1998 年のワールドカップで初優勝を成し遂げて以来，代表チームの大部分をこの養成所出身者が占めてきた。この中央集権的な選抜システムが，選手にさまざまな悪影響を与えたのではないかという批判が生まれたわけである。フットボールもチームスポーツなのでさもありなんと思うが，エリート養成システムの人間形成云々という話は，実証的根拠を見つけるのが難しいだろう。確かなのは，その分，地元クラブやユース組織からの代表への返り咲きは難しくなったことだ。こうなると，地元クラブの選手だけではなくて，何より観客のモティベーションも維持するのは難しくなる。

地元クラブが苦戦を強いられているのは，代表チームにかかわるバイパスの存在だけではあるまい。欧州のフットボールリーグは，基本的にドメスティックである。例外的にインターナショナルなチームがあるにすぎない。たとえば，各国のトップリーグであってもほとんどのクラブのウェブサイトは自国語のみ。PFC に典型に見られるように，どうにかスタジアムに行ってもチケットや飲食物の売り場にはたいした表示すらない。大げさにいえば，知っている人に説明不要なことは説明せず，説明しなければならない人が来ることを想定していない。しかし，近年のいくつかのクラブは，たとえば暗黙の約束事を何も知らない外国からの観光客を観客として真剣に考え，そのことによって桁違いの収益を生み出すようになってきた。グローバル化の時代というのは，単に人々や物が国境を越えて行き来するという物理的な現象であるというよりも，おそらくこのようなドメスティックな物事の価値が，金銭的にも主観的にも動揺している時代なのではないだろうか。PFC に感じる時代に取り残される感覚は，フットボールの行く先を心配させるに十分なのではないかと思う。

かんばやし・りょう　一橋大学経済研究所准教授。最近の主な著作に『日本の外国人労働力――経済学からの検証』（共著，日本経済新聞出版社，2009 年）。労働経済学専攻。